

「ユダの嘆願」

2021年07月12日

「この子がいないと分かれば、父は死んでしまうでしょう。あなたの僕である白髪の父を、僕どもは悲嘆のうちに陰府へと下らせることとなります。僕は父にこの子の安全を請け合って言いました。『もし、この子をあなたのもとに連れ戻さないようなことがあれば、私は生涯、父に対してその罪を負います。』それでどうか僕をこの子の代わりに、ご主人様の僕としてここにとどめ置き、この子は兄弟と一緒に上らせてください。(創世記 44 章 31 節～33 節)

ヨセフが仕掛けた罠とは知らず、銀の杯を盗んだ罪を負わされ、ベニヤミンだけが奴隷としてエジプトに残される羽目になった。兄弟たちは、ベニヤミンを父のもとへ連れ帰ることができないとパニックになった。この時、四男のユダがヨセフの前に進み出て、ベニヤミンを救い出そうと、命をかけての嘆願をした。著者は、44 章 18 節～34 節まで、ユダの嘆願を記している。私の注解より、本文の方が遥かに感動的で、そのままを転載したい。

「ご主人様、お願いです。どうか僕の申し上げることに耳を傾けてください。どうかお怒りになりませんように。あなたはファラオのようなお方です。ご主人様は僕どもに、『父や兄弟がいるのか』とお尋ねになりました。その時、私たちはご主人様に申し上げました。

『年老いた父と、父が年を取ってからもうけた子、末の弟がおります。その兄は亡くなりましたが、同じ母の子で、残っているのはその子だけですから、父はかわいがっています。』すると、あなたは僕どもに言われました。『その子を私のところに連れて来なさい。この目で確かめたい。』私たちは、ご主人様に申し上げました。『あの子は父と離れることはできません。父と離れたら、父は死んでしまいます。』しかし、あなたは僕どもに言われました。

『その末の弟と一緒に来るのでなければ、あなたがたは再び私の顔を見ることはできない。』私たちは、あなたの僕である父のところに上って行ったとき、ご主人様のお言葉を伝えました。すると父は申しました。『もう一度行って、食料を僅かでも買って来なさい。』私たちは言いました。『下って行くことはできません。末の弟と一緒にあれば、下って行くことはできます。しかし末の弟と一緒にでないかぎり、あの方の顔を見ることはできないのです。』すると、あなたの僕である父は申しました。『知ってのとおり、妻は二人の男の子を産んだ。ところが、一人は私のところから出て行ったきりだ。きつとかみ裂かれたのだと思う。いまだに会っていないのだ。それなのに、お前たちはこの子までも、私から取り上げようとする。だがこの子が危険な目に遭いでもしたら、お前たちは白髪のこの私を、苦しみのうちに陰府へと下らせることになる。』今、私があなたの僕である父のところに帰っても、この子が一緒になければ、父の命はこの子の命にかかっていますから、この子がいないと分かれば、父は死んでしまうでしょう。あなたの僕である白髪の父を、僕どもは悲嘆のうちに陰府へと下らせることとなります。僕は父にこの子の安全を請け合って言いました。『もし、この子をあなたのもとに連れ戻さないようなことがあれば、私は生涯、父に対してその罪を負います。』それでどうか僕をこの子の代わりに、ご主人様の僕としてここにとどめ置き、この子は兄弟と一緒に上らせてください。この子が一緒にでないかぎり、どうして私は父のもとへ上って行けるでしょう。父に降りかかる災いを見るに忍びません。」ユダの言葉には、ベニヤミンへの年老いた父の愛に応えたい一心がこもっている。彼の理性的で、家族愛に満ちた嘆願は、ヨセフの頑なな心を解きほぐす。